



## 第九卷第十一號

一年の好時節

徳富蘇峯

好天氣に最も快感の動くは、鳥雀と小兒なり。旭日紙窓に映すれば、増上  
の鳥雀は囀々たり、縁邊の小兒は欣々たり、彼等無心なり、故に自然の儘に動  
くなり。即有心の人といへども、焉ぞ好天氣に向つて快感なきを得んや。人  
も亦外圍物の兒と知らずや。東京の好天氣は、秋にあり。寧ろ晩秋、初冬  
の際にあり。東坡が一年の好時を目して、橙黄橘緑の節にありと云ひしは、  
東京に於て最も然るを覺ゆ。萩花枯れ、菊英開き、紅葉に及び、更に參天の  
銀杏が琥珀色の瑠璃を滿枝に飾る時に到るまで、碧天拭ふが如く、瀟氣人を洗  
ふ。遠きに登りて望めば、寥廓の長空は、滿郊黄雲に接して、たゞ東に筑  
波の雙尖を見、西に芙蓉の白雲を眺むるのみ。所謂晴空一雁排雲上、直惹詩  
情到碧蘿の情は、たゞ東京の晩秋、初冬に於て之を見る。若し夫れ東  
京の春に到りては、風多く、雨多く、曇天多く、乍ら綿衣を纏れ、乍ら裕衣  
を着け、又乍ら綿衣を脱ぎ、氣候の變、朝以て夕を測る可からず。或は幸にし  
て晴霞滿目、淡靄櫻枝を望むる時に於ても、惡風凄々塵を捲き、人をして  
頭痛岑岑たらしむ。要するに東京の花は、天命を以て終るもの始んど稀なり。  
機むべし、梅花、桃花、櫻花、梨花、海棠花、皆無残なる最後を遂ぐ。若し警語を  
以て云へば、京都の花は縦に散じ、東京の花は横に散る、横に散るとは風雨の爲に  
散ればなり。生非壽命、不爲花とは東京の春花を葬むる絶好の碑銘に非ず  
や。それ湖畔詩人を産し、大澤英雄を生ず。木炭を燃すの巴里人士は輕快に  
して石炭を焼く倫敦人士は遲重なり。外界の人に於ける、その感化侮る可か  
らざるものあるなり。

今や一年の好時節は東京を見舞へり。此の時に於て、なほ馬蹄車轍の際を遶  
驅し、營々として面上三斗の紅埃を拂ふなくんば、それ此の玉の如き秋色に  
孤負するなからんか。